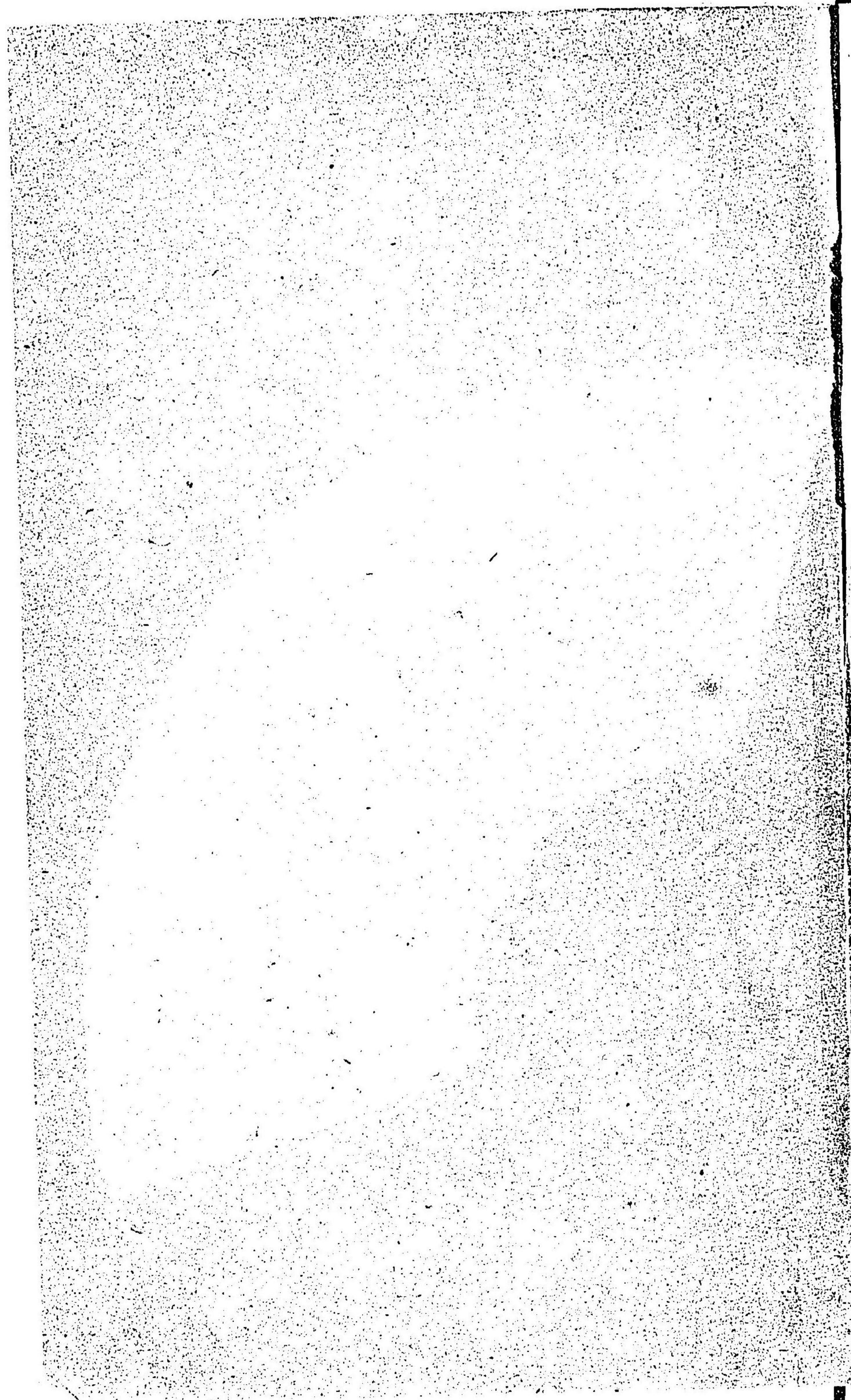


297
3
230

文學士
土子
笑面
先生
戲著

新話

一名
講談
落語
の論



№16345

序



風會の會員にあらざ改良演藝會の株

ゞひとり講談落語の事を論して樂し

む者也曩の東洋學藝雜誌に落語改良論を出し今日

落語の改良すべきかどくを示したりしが其の後も

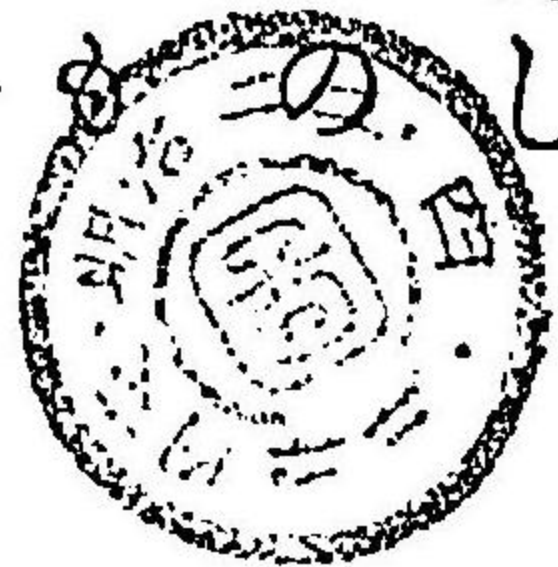
折りあらはさる少しく精しき論をもあらはさんもの

し事どもありしかど流石に本業に忙

はしく話の論する時とてもあらざりきざりしを去年

の夏春の屋ぬしど共に京のあたりへ赴きし折豊橋の

やどりにて暑の堪へがたくしてまどろみかねしまゝ



ぬしと小説落語の事共かたりあひしが是より京にいたりてしはしかほどのやどりにも折々は話の論いで小説と性質の異なる點をかたり難易のある處を辨じなどしたり己東都にかへりなほ筆に物して同好の人々に示し其が教正をも乞はんものとおもひしのみにて果ざりしを此のころ聊かの閑ありしを以ておもひいでたるまゝを綴りて一小冊子とはなしつ、今少しく熟考してとはおもへどもさるひまもなく且は書屋より切に望まるゝものから杜撰とは知りつゝ與へたり、春の屋ぬし此の事を聞きて曩にかたりあひし事もあ

れば批評を附すはいかにどの高意素より乞はんとおもひし事なればぬしが玉筆を汚すにいたれり、大方の諸彦も高評を賜はらばまた幸を重ねん

明治二十二年二月

土子笑面誌

話術新論目錄

第一章 緒論 一頁

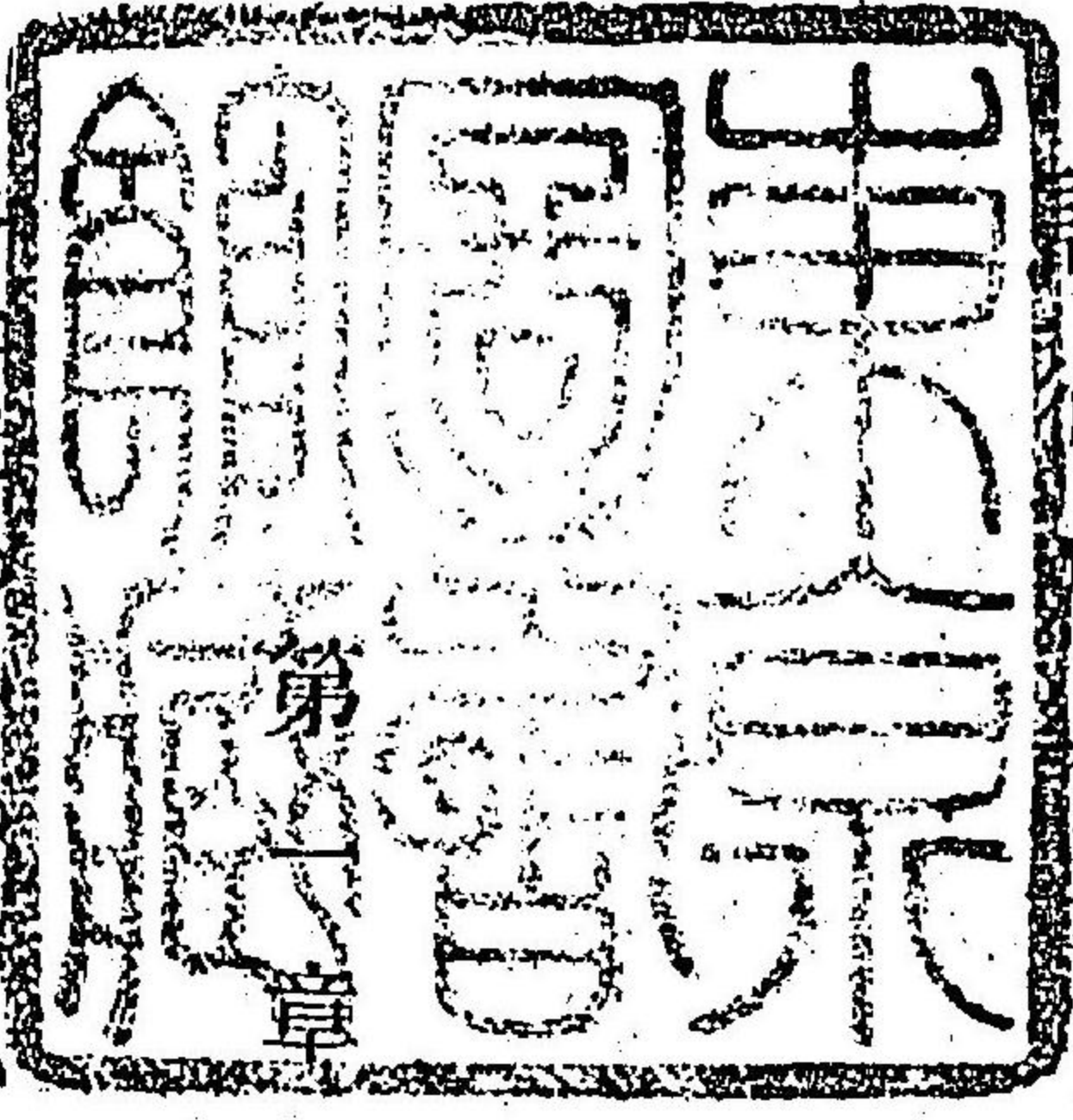
第二章 話術の定義解釋 十七頁

第三章 話術の法則 三十一頁

以上

誤		正	
九十七	七十六	五十九	五十四
一	十二	八	七
話術	「ガサツ者ガ」	話	「梨園」
話術家	「ガサツ者」が	語	「梨園子弟」
		九	四十六
		十一	八
		言話	如何にも、無
		言語	如何にも無

話術新論



緒論

土子笑面戯著

凡そ世の中の事の理論ありて起るものあれば世人は先づ理論を知りて而て後、実際の事を知るべき筈の様なれども、いよしへよりの成來りを見るに多く、いまづ實際の事を知りて其の理論を知らず、漸々後、いたりて理論を發明するを常とす。たとへば水の流るゝ事、火の燃ゆる事は實際よ

はよく知りて疑ふものあらざれども其の理論は中々未開人の知らざる所あるが如し、是れおもふは實際の事たる皆直接又耳目又入りて人の感覺を惹起すことやすけれども理論は素と無形として智力進むよあらざれば解しがたければ也、されば昔日はたゞ實地の經驗上より知りたりし事爲したりし事も人智の進むよ連れて種々理論を研究し今日論實共よ頗る發達したるもの少からず、かの醫學といひ工學といひ一々枚擧よ違あらず、然り而してもと理論ありて實際の事起るものなれば理論よ通ぜずして實際の事のみを知るは本を知らずして末耳を知る譯なれば決して識者のとらざるところあり

實際の事といひ吾人が耳目よ入るもの皆然らざるのあきを

以て素より數へ盡すことあたはされども其の中よは衣食住の如き人生欠くべからざる事あり又娛樂の如き必ずしも欠く事あたはずといふ程のものよもあらざる事あり、然れども娛樂を欲するは人の常情なり、爲すべきの事を爲し盡すべきの事を盡して而して娛樂を致すは眞又文明人のなすどころよして人生天與の幸福を完うするものといふべし、さりながら娛樂の途一よして足らず人心のおおむかからざるともよ之を慰むるの方法も種々あり、種々ある中よは善きもわり惡しきもあるは數のまぬがれざる所なれば娛樂の爲めよ身よ惡結果を來し世よ不貞の影響を及ぼし反て天與の幸福を完うするあたひざるものなしとせず、此の如きは眞の娛樂よあらざるあり、此よ於てか吾人は善

其かる娛樂の途を撰ばざるへからず、己は茲も吾人が正し
取るべき娛樂の途如何を論ずるよりはあらされども今日世
人の喋々する美術の如きは即ち善良なる娛樂の一途なら
んと信ずるなり
さて美術の中にも種々あるうちも世も所謂遊藝の如きは
貴となく賤と亦く普通吾人の樂みとする所にして娛樂の
途としては詩歌、繪畫、彫刻等よりは其の範圍遙く廣し、範圍
廣きが故に關係するところ隨て大なるや明なり、此の故を
以て政府曩も音樂取調掛を設けて我邦從來の音曲を吟味
改良し今日とありては堂々たる音樂學校を見るよいたれ
り、此くしてたゞ實際も音曲をなすのみならず大に其の理
論をも研究するあり、次て演劇改良會の起りしより以來演

劇の事たる世間の一問題となり甲論し乙駁し未だ充分の
成功を見ずといへども多少の改良と共に亦演劇に係る理
論を知るにいたれり、小説は友人春の屋隴君が其の理論を
研究し改良の卒先者とありし此方中々世間の注意を惹起
し方今にては小説家を以て任する者も多分とあり進歩決
して少々にあらざるを知る、かく音曲といひ演劇といひ小
説といひ多少其の理論を叩くに至れりといへども講談落
語に至りては未だ之が理論を叩きし者あるを聞かず、然る
に講談落語は演劇ほど大掛りならず又小説の如く文字を
知る人にあらずば解しがたしといふにもあらず若男女
貴賤都鄙之を好む者實に多く樂みも亦決して薄きにあら
ざる、我邦此の技藝の起りしは徳川氏の時にありとかい

ひ傳へ講談は落語より前に始まりたりしものゝ如く爾後今日に及ぶまで名人上手の聞えあるもの少なからず技藝の進歩も著しといへども稍もすれば猥褻に陥り殘酷に過き風化に不良の影響を及ぼすもの少々ならず、且つ己を以て見れば或は首尾相應せず或は大跡の精神に取るべきもの少き等種々改良を要する點あり、是れ多くは根本の理論に暗くたゞ淺薄なる耳目の感覺にのみ汲々として技藝の進歩を圖りしに據る、熟らく講談落語に係る理論を考ふれば中々に研究すべきこと多く識者の一考を價するものあり、然れどもみだりに理論に走せて實際にはまらざるは勞して功なく或は反て折角の技藝をして無味の地に陥らしむるにいたる奇きを保せされば實際の技藝と相調和

せんこと素より望ましき事なり、されど己自ら高座に上りて理論と技藝との調和を世人に示すことあたはざればたゞ理論は理論として愚考を示し以て識者と技藝家との批判を乞ふの外なきあり

前段述べたる講談落語といふ語は近來世人のいふ處よして古より俗又は講釋、おとしばあし、人情ばなしなどいひたりしを漢語躰に直してかくいひたるあり、此頃は落語を改めて昔話といひかへたるよし、是等はたゞ名稱上の争ひなれども己は兩者の遊藝を總稱して「話術」といふ、是れ本書の表題を附したる所以あり、固く講談とは書き物を前よおきて讀しものよて今日よても講談をよむと稱しはなすとは云はず、落語は固く即座よ面白味あることを話したりしも

のよて書き物をよみしよはあらざりき、然るよ今日の講談師も讀まずよ話し落語家もまどまりたる歴史、小説ものなごをついけて述べ只かたきどやはらかきとの區別はあれど讀むと話すとの區別は薄くあれり、落語家よても三題噺の如く即座の辨才を以て巧よ人を感じしむる類の外は大抵書き物を暗記するよ似たり、まして新作物などよいたりては種々原稿を直したる後演するよしよて全く辨才を以て直よ演するもの少あし、故よあとし噺の如き輕妙のものすら人物の假聲、洒落のいひかたまで版であしたる様あり、さりながら講談師が修羅場を讀む如く目前よ書き物を置きて讀む事はなし、また技藝者の辨才次第よて随分當座即席のことをいふもなしとせず、兎よ角純粹よ書き物を讀む

と之を基として話すとは味よ於て大よ差あり、故よ己は話す方より見て話術と稱する也、實よたよ三寸の舌を基とし半身の動作を加へて衆人を感じしめ美術的の娛樂を興ふるは一種美妙の術といふべし、今日の有様よて講談と落語とは就か優れるといひ、兩者一得一失ありて一概よいづれを兄とも弟とも斷定しがたしと答ふるの外なし、講談は元來武張りたるものよりいでたるを以て大軍の合戦、勇士の鬪争、議論、評定等事の勇壯活潑壯嚴廣大ある類は其の妙所ともいふべく此等の點よ於ては落語の及ふどころよあらず、然れども今日の講談は婦女老若の言話を使ひ分け細かき人情を述べ人の性質を寫出すの術よ乏しく固と武張りたる事より出たる故よや婦

女の假聲の如きは最も拙かり前後の續きを知るゝあらずれば男あるや女あるやを解するにすら苦しむ程なり、近頃は少しく注意する者あれどもなほ遠く落語も及ばざるを如何せん、之も引きかへて落語は勇壯活潑の風に乏しくとも女は女、老人は老人、子供は子供、おさんはおさん、權助は權助の假聲を使ひ聞く人をしてよく其の何人たるやを知らしめ以て感情を深うせしむる之、凡そ人の性質をあらはすには其の言語を以て最も大切ありとするは今日小説にても演劇にても老若男女の言語は判然分るゝを見て知るべし、弓形の老人も三尺の童子も荒くれなき男子もやさしき媛君も差別なき口をきゝたらんはあまり面白くはあらざるべし、世人或は能のうの女の詞の如きは男の詞と差はあれ

ども落語ほどの差なきもいふべからざるの趣きありとするものもあらんが能の詞はわたまから今日の言語とは異なるものもあして寧ろ歌も近し、もとより講談落語と同日の論もあらず、己は能を惡しさまいふもはあらねど人の性質を顯はし人情を感せしむるは今日の演劇のかた遙とほ優れりとおもはるゝなり、是れ他なし大切なる言語として今日の人は解しやすければ也、又夫れ輕妙ある滑稽もいたりては實も落語の專賣物として講談はあろか諸藝の中他も比類を見ざるなり、而して滑稽のものたる其妙なるに至りては戀こひを散し愛を拂ひいふべからざるの味あるは己の茲こゝも喋々せざるも圓游小さんを知るもの知る所あり、さりなから滑稽は兎角く猥褻も流れやすきもの故今日の落

語は講談より比すれば賤しき所ありとせず、且つ又演ずる者の風より見ても講談師の机をひかへ袴をうがちそのいふ所は堂々たる國家の治亂興亡にわたり貴族の事なればもの多けれども落語家より殆んどこれあり、かく云ふときは講談師より加擔して落語家の悪口をつく様あれども講談も鼠小僧、國定忠次等盜賊博徒等の事を述べ或は道より立ち或は藪子張りを設け車夫馬丁等下等社會の慰み物となり通常の席としても講釋場といへば多くの熊公八公のあぐら連中ぬころび組の客多し、此の點より見れば講談必ずしも賤しからざるゝあらず、要するに講談はかたく落語はやはらかし、話の事柄もかたきもありやはらかきもありとすれば兩者其の處を得るゝ

於ては共に美あり妙ありといふべし、今日の實際にてもやはらかき筋の事は講談師にも落語家の如き所あり、かたき筋の事は落語家亦講談師に類する風なきにあらず、如燕、一か世話物の講談は少しく落語畑を侵すところあり、燕枝か人情はあしは時によると講談海に入るの思ひあり、是れ一には技藝家の性質によるとはいふものゝ話の筋の然らしむる所ありといはざるを得ず、試に關原合戦記を圓朝に演せしめ鹽原多助の傳を燕尾に演せしめなばあまり美妙とほおぼへざるべし、近頃に至りては一層講談落語相近寄りたり、圓朝すら場合によると聊か講談口調を聞くことあり、是れ殊更に講談を真似るにあらず、話術として勢然らざるを得ざるの必要あれば、講談師の洒落などには往々落語

の口調を去る事遠からざるものあるも亦おなじ、凡そ強くかたき事は何處までも強くかたき様にはなし弱く柔らかき事は何處までも弱くやはらかき様に話してこそ眞に人の性質を寫し人情を感ぜしむるものなれば己は話の筋、話の場合により講談落語を併用して愈々美妙の味を出し美術の美術たる所とならんと信ずるあり、只人には癖あるものなれば或は講談に偏し或は落語に傾くもの多く兩者兼備の名人は中々に得がたかるべく又完全といふ事は世に期しかたき事なれども話術の本體としては之を標準とせざるべからず、故に前にもいひたる如く己か話術と稱するは今日の所謂落語のみを指すにわらずと知るべし、諺にも十人よれば十色とて人には好嫌すききらひのあるものなれば

能を演劇よりも好み講談を落語よりも樂しとする者もあるべければ己は敢て是等の人々に向ひて是非とも己か説に同意せよとはいはず、素と本論の事の如きは所謂遊藝にして農工商等富國榮家の具と呼ぶほどのものにもあらざれば各自か心に娛樂を感ずる所を娛樂とあして可なり、されど世の中の事は大抵一定の原則あるものにて娛樂の事も億兆の人皆な異なりとはいへず美の美たるは大抵の人に其の感覺を起さしむる様あれば二三偏癖の者を除くの外は娛樂の感覺に於ても大差あからんと信するべし、即ちかたき講談物をやはらかき落語口調に演じやはらかき落語物をかたき講談口調に演じたらんには一時珍奇ありとて欣ふものもあらんが深く之を美妙の味ありと感ずる人

は少々からん、之を美なり妙なりと感ずる人は即ち二三偏癖者ありといふの外なし、是とても世に害なきものあらば偏癖者の偏癖者の娛樂としておくも可きれども之れが爲め通常人の娛樂の途に改良を加へざるが如きは識者の取らざる所なり、己の考へにては前段述べたる通り筋により場合により講談落語を兼用するを以て通常人の心に一層美妙の感覺を惹起すべしとあもふなり、然れども是れ或は己の偏癖なるやも知られず此に至りてはたゞ世の衆評に任すのみ

第二章 話術の定義解釋

物の定義を下す程六つかしきことはあし、短に失すれば物の性質をいひあらはして餘さずといふ譯に行かずさりとて充分にいはいはんとすれば長篇の説明となりて定義の本旨に合はず、此の故に物によりてはなまじ定義を下して誤解の種とあさんよりは寧ろ充分に説明して而て後ちに自ら知らしむるの方法を取ることあり、今話術の如きは古來定義を下したる者もあければ短才の己には之を下すこと随分の大任といふも可なり、然れども世間議論の種にもと

職云、笑面
君は活術家
の恩人なり
未だ此術を
家若し定む
義にたがひ
ふにたがひ
ば寄席は無
識の樂園に
るにさむま
らす貴賤上
下の僣賤上
さなるべし

欲して愚案を示し次て解釋を下さんとす
話術とは事件と人物とを美術的に口述するものをいふ、是
れ已か話術の定義なり、話術は今日の所謂講談落語の如く
歴史的と假作的との別なく兎に角くまどまりたる一の事
物を話すものにて吾人が通常の冗談挨拶などは異なる
あり、事件とは天變地異より場所の景况動植物の作用、天氣
時候等に至るまで總て自然に出でたる事及び孝行、忠行、戀
愛、滑稽、鬭争等總て人の行為に起りたる事一切を包含する
者と知るべし、苟も人の性質心情に外なるものは皆事件と
總稱するなり、單に物の色形なども亦事件の中にありとす、
次に人物とは人の性質心情を指すものにて善人、惡人、荒き
人、優しき人、意地の惡き人、卑劣なる人、大膽ある人、臆病なる

人等千差万別の人柄をいふ、則ち善人を口述して善人ら
しく惡人を口述して惡人らしく感せしむるは所謂人物を
口述したるあり、美術的とは實は頗る解しにくき語にして
要するによく事件と人物とをいひあらはし聞く人をして
美妙の感覺を起さしむといふに外ならざれども抑も美と
は如何なるものかといふ問題に至りては古來大家の論說
少からざるも己を以て見れば未だ充分の説明を得ざるが
如し、物の順序を得て調和したるも美なり、物を寫して真に
迫れるも美なり、艶麗も美あり、雅致も美なりとすれば一概
にいつれを美の總原素也とも斷定しがたし、されば話術に
して事件を順序よく述ふるも美なるべく人の性情を寫し
て真に迫りたるも美あるべし、輕き洒落、淡き滑稽等皆美の

感覺を起すに足る、然れども又事件の如き突然波瀾を生し
 時に或は順序を破りて反て美味あることあり人物の如き
 殊更らに眞に迫らしめず飾りて反て美味あることあり、此
 の故を以て一概に順序よく眞に迫れるを以て話術の本躰
 之とも断定しかたきや明なり、而て話術はもと人の娛樂の
 具にして音曲を聞くといひとしく美妙の感覺を惹起すを主
 とす、美妙の感覺とは如何あるものかはたゞ人々其の心に
 問ふの外なく今日美の論一定せざるに當り短才を以てい
 かでかよく之を説明するを得ん、既に説明することあたは
 ざる上は不完全ながらも美術的といふ語を下すの外をか
 らんとおもはるゝ也、強ひて是れを俗意に直さば面白くも
 でもないふべき歟敢て之を主張するにわらず、如何にして美

術的に事件と人物とを口述し得るかの問題に至りては次
 章に於て話術の法則を下して論究すべし
 口述とは通常の言語の如く直接又口頭よて物いふ義とし
 て是れ歌曲、文章等と區別したる所なり、淨瑠理の如き小説
 の如き共に事件と人物とを美術的にあらはすものにして
 而かも淨瑠理の如きはおあしく直接に口頭を以てあらは
 すものなれども淨瑠理は樂器を使用し總て格段なる節せうを
 附し人物の言語の如きも臺詞せうごと稱し通常の言語とは違ひ
 又小説は文章を以て書きあらはし直接に口頭にて述ふる
 にわらず、然れども單に述といふ時は通例文章の上にも使
 用するとある語故殊更らに口の一語を加へて小説の類と
 分ちたるなり、話術とても吾人が日常のはあしをなすとは

異なり多少節を附くるを要することなきにあらざれども之を歌曲に比すれば樂器と稱する程のものなく只だ平語を以て美妙にいひまはすのみ、講談師あどの中には必要もなき處へ甚しく節を附て演ずるものあれども話術として見るときは一派淨瑠璃、演劇等と異らしめあまりに節を附けさるかたよしとおもはる、只勢止みがたき處は美妙の感覺を惹起さしむる丈けには節を附けさるべからず、尤も技藝家が各特別の一派を立てんとあらば其の隨意あれどもおもふに話術の本跡としては淨瑠璃、演劇とは全く離れたる所に美味を出したきものあり、さるを以て唱ふども語るども讀むども書くどもいはれずたゞ口述といふの外なきあり、然り而して口述するものは皆話術なりとはいはず吾

人か日常の談話の如きいづれも口述に相違はあけれども多くは用談にして實利あるも未だ美妙の感覺を起すにいたらず、よしや四方山よしかたはあし、冗談等實利よりも寧ろ娛樂に近きものにて未だ美妙といふを得ず、苟くも美術的に口述するにあらざれば話術と稱するに足らず、又話術は必しも事件を假作するにはあらずたゞ既にありたる事件、人物若しくは既に小説家などの假作したる事件、人物を口述するに止まるものにして作るにあらざらず話すべし、是れ話術たる所ありと知るべし、勿論事件、人物を美術的に口述せんには言語のいひまはしかた身振りの工合等多少修飾形容を要し話術の力を以て幾分か假作するところもあるべけれど、も是たゞ枝葉の事のみ彼の狂言作者、小説家の如く大跡話

の筋、趣向まで假作するにあらざるを、此の故に圓朝の話の筋、趣向を評して圓朝を拙者しといふは恰も狂言の筋拙なきを見て直に團十郎、菊五郎を拙者しといひ淨瑠璃の作の拙なきを以て越路、綾瀬を拙者しといふとひとしく話術よりいふ時は之か爲め敢て圓朝の事件と人物とを口述するに巧ある技量をきづゝくるに足らず、素より兩者共に巧なれば是れに越したる事はなけれども純粹の話術としては單に口述の方のみを探るべきを、十遍舎一九は膝栗毛を著し彌次郎兵衛、北八の兩人物を假作して巧に滑稽の事件を假作しよく讀者をしてその腮うでを外はらさしむるは圓遊、小さんの落語にも優る處あれども是小説に巧なるのみ之を口述するの術に至りては一九また圓遊、小さんに及ばざりしな

らん

前數段に於て話術の定義にある字句の説明を爲したれば是よりは事件と人物との關係を説き話術は兩者を口述するものたる所以を明にせん、話術の上よりいふ時は事件を主とすとも人物を主とすとも定めがたし、畢竟兩者を美術的に口述すれば即ち話術あり、人の性情のみを寫して事件を美術的に口述する事あたはざれば未だ完全なる話術といふことあたはず、安政の地震、磐代の破裂、禽獸の有様、風雨の模様、山水の景色、座敷の間取り、道具の配置等を口述し聞く者をして真に其の域に在るかのおもひを爲さしむるか如きは中々に美妙の味ありといふべし、たゞ「安政年間ニ大地震ガアツテ人家ガ多クツブレマシタ」、「磐代山ハ破裂シ

講義云、落語
を人に論ず
し未だ論ぜ
べしあるを
より君を實
聞かす音を
笑面をなす
勿論知らず
識取らざる
に上手の中
術に人の話

テ山ガナクナリマシクも電信文見る様に述べたりとて
未だ美術とは稱しがたからん、然れども又事件のみを口述
して人物を口述せざるも不完全なり、例へば仁木弾正か刃
傷も事件なり政岡の飯たきも事件なりといへども弾正の
刃傷は其の姦悪の性情より起り政岡の飯たきは其の忠義
の性情より出でたる者なればおなじ刃傷、飯たきの事件を
述べ刃のするどさ立廻はりの様子、飯たきの道具立取りま
はし等如何も眞も迫るやうな感ぜしめても其の中よお
のづから弾正の姦悪なる性情と政岡の忠義なる性情とを
あらはさざれば眞も美術といひがたし、之を喩ふれば政
岡を團洲が演すと下等役者が演すとの差あるが如し、單
人の行爲のみを述ぶるは形のみとして精神を失し、此の精神

なもしあらは
せしむる道
理を絶えし
ても無絶え
此論から絶
術論の絶え
の術論絶え
るべし

は即ち人物として之をあらはすこと頗るかたし、人或はい
はん事件を美術的口述せんは須らく人物をあらはさ
いるべからざれば敢て事件と人物とを別けて定義を下す
まはおよばざるべしと、如何も刃傷、飯たきを美術的口
述すといふ以上のおのづから弾正、政岡の性情をもあらは
るゝやうなれども事件と人物との理論上異りたるもの故
判然分つたかた當然なり、何とされば事件の自然の出来事及
び人の行爲と、人物の人の性質心情なればなり
之を要するに事件は自然的と人為的との二種あり、自然
的事件といふ天變地異其他偶然の出来事等人の意を離れて
起る事をいひ、人為的事件といふ總て人の意より起る行爲を
いふ、自然的の出来事も面白き事なきもあらぬと其變

化少なく人意の働らきより生ずる細微の趣向あり、人爲的
 事件の人の面との異なること共々種々の意志より出るものなれ
 ば大と小と細と粗と千差万別にして而かもよく其の人物
 をあらはすの具となり得るを以て聞く人自身の心よひき
 くらべて味ふの妙あり、此も於てか古來講談落語は大抵人
 爲的事件の筋にして多少此の中も自然的事件の混入する
 もあれども最初より自然的事件のみを筋としたるもの少
 し、是れ聞く人にして甲を好むもの多ければ、俗に所謂人
 情をうがつといふは人爲的事件にあるものにして吾人日
 常世渡りの上に類例を見る事多くために一層の味を出す
 ものとす、且多少人物と其の行爲との關係をあらはし實際
 に於て利する所なしともいひがたし、總して人物をあらは

すには多少人爲的事件によらざるを得ず、人物善ければ其
 の爲すところの事件も亦よく人物悪ければ其の爲す所の
 事件も亦悪し、故に深く尋ねれば人爲的事件と人物とは實
 際に於ては密着したる所あり、然れども決して同物にあら
 ざるべし

第三章 話術の法則

書に書法あり書に書法あり話術亦其の法則あきにあらず、然れども此の法則は則ち事件と人物とを美術的に口述せんには此くすべし此くすべからずと指示するものなれば單純なる一篇の空論とは異りよく實際に當りて研究せざればうかつに論することあたはざるものなれども己平素聊か心に考へ居る事もあれば茲に愚案の程を示して實際家の教正をも受けたく又参考ともなさんとして本章を載する事どはあしたり、而して話術の法則といふ以上は既に話

術とは如何なるものかは明なるものとして法則を下したれば法則中話術の定義にある字句の解釋の如きは前章の説明に譲りて茲には重ねず

第一 話の地は平語を以てし人の言語は其の人相當の語を以てすべし

話はもとたゞ口述するものなれば節附をして唱ふにあらざ又文章を綴ぐるにもあらざるは前章に於て説きたる通りなれども吾人が今日口述する語には種々あり、或は頗る叮嚀なるあり或は甚だ横柄むらびあるあり、和學者は多く雅言を用ゐ漢學者は頗るに漢語を混へ上等社會の語は上品に下等社會の語は下品あり、而して小説、淨瑠璃等を見るに八犬傳の文は八犬傳の文あり太閤記の文句は太閤記の文句な

り、貴顯紳士が讀みても別に叮嚀にもならず車夫馬丁ありとて殊更らに横柄にも聞えず、貴と云く賤となく共に面白味を感じざるゑ、話術も一の術として見る以上は殊更らに人に媚ぶるにも及はず又漫りに威張るにもわたらず、たゞ其の中間に在りて誰にでもわかりやすく美術の感覺を惹起せば可之、貴人の前ありとて殊更に叮嚀ある語を使ひ賤者の前なりとて横柄ある語を用ゐるが如きは見識卑し、如何にも社會の秩序として貴賤上下の別あるからは其の日常の語は習慣其他に従ひて夫々差別あるべしといへども是は決して話術としていふものにあらず、之をたどれば恰も淨瑠璃の太夫が其の通常の言語は貴人に對するときには叮嚀なるべしといへども淨瑠璃を語るに當りては別に文句

に變りなきが如し、されば己は話術の地の語は貴賤の別なきものを取るべしとなす、是れ平語といひたる語の意味の一あり、かく貴賤の別なき語を以てする時は如何ある場合にては差支なし、横柄あらざるか故に下等社會の受よく強ひて野卑失禮あらざるが故に上等社會に於ても不快をおぼへず、此くして廣く世人の樂みとはなるべし。然れどもこれたゞ大體の論にして一より十まで盡く然りと斷言するにあらず、場合によりては殊更らに可憚なる語を使用せざるを得ざる事あり、例へば畏しきあたりの事どもを口述せんに所謂平語を以てしては不敬なれば「られ」「玉ひ」などいふ敬語うやまいごを用ゐざるべからず、總して吾人が敬すべき人の行爲などを述ふるには多少敬語を用ゐるべし、是れ

敢て媚ぶるにあらず人間の禮儀として社會の秩序を保つに必要なればなり、只社會の秩序を保つに必要なるのみならず話術として見るも敬すべき人をあらはすには敬語を用ゐざれば聽聞者の感じ薄きことあれば、今一二實例を擧げて之を示さんに楠正成が繪旨を奉受する處を口述するにあたりたゞの平語を以てしては不敬あり、不敬なるが故に正成が天皇陛下に對しまつる感情を口述するになにぞなく調子ぬけて君をおもふの様薄し、又聞く人をして一天萬乘の大君の御様子を感じしむること少し、是等は宜しく「後醍醐天皇正成ニ繪旨ヲ授ケ賜ヒ云々」、「奥殿深ク入り賜ヒタル御後影ヲ伏シ拜ミ云々」といふべし、然らざれば事件と人物とを美術的に口述することあたはず、此の他總

べて皇族方は敬語を使用すべきこと勿論あり、尤も如何なる邊まで敬語を用ゐべきか又人によりて如何なる種類の敬語を用ゐべきかといふ問題は中々に込み入りたる事にして到底一小冊子の盡すべきにあらず、又たゞ話術としてののみ論ずべきにあらず文章上よりも規則なきに非ざれば己は茲に深く論し入るをあさず、たゞ話の地は平語を以てすべしとは云ものゝ場合によりては敬語を使用すべしといふを以て足れりとするゑ、話術家が客に對して客の事自身の事等をいふには相應に尊卑の語を使ふべきは勿論とす

平語とは前に説きたる通り叮嚀に失せず横柄に過ぎざる語をいふものなれども是も亦一々實例を擧げて論ずること

どあたはず、又其の區域も中々に六つかしけれどもさりとて二三の例を示めさずば大凡その程も知れず讀者をして了解に苦しましむるに過ぎざるべし、己おもふに今日の落語などには甚しく叮嚀ある語を使ひ又甚しく横柄なる語を用ひ前後不調和あり、此の横柄、叮嚀の語を指示して以て己の所謂平語を示めさん、たとへば「モトオ、話ハ根ナシ艸デ云々」「風ガフイテマイリ、マス雨ガフツテマイリ、マス云々」「此ノ人ハ正直デゴザイ、マスカラ云々」「ナニヲ申スモ、モト一人テクル雨ガ降テクル云々」「此ノ人ハ正直デスカラ」「何チイフニモト、一人」などいふべし、又「云々デグスカラ」「云々ナカト」「云々ガアルチ」「云々スルヤ、ツデ」「云々シヤ、ガ」等は野卑横

柄へ、是等は「云々デスカラ」「云々ナソト」「云々がアリマス」「云々スルモノデ」「云々スル」などいひたきものあり、此の中にも「ゲス」「ナカ」ノ兩語は今日の落語家が最も多く使ふ語にして最も野卑に聞こゆるなり、「酒ハ愁ノ玉箒キデゲスカラ」などいはずに「酒ハ愁ノ玉箒キデスカラ」といはい誰が聞くも差支なし又意味合に變りもなし、一寸したる様あれども「ダ」の語と「デ」の語とは使ひ方によりてはチト横柄に聞ゆるあり、「云々ト云フ様ナ譯ダ」と切る時は何やら横柄なれども「云々ト云フ様ナ譯デ」ト切れば差のみ叮嚀にもあらず横柄にもあらず所謂平語とあるへ、尤も言語哲學から見たら「ダ」と「デ」とは意味に異りたる處なきにもあらずさるべしといへども語の切れ即ち終りに使ふ時は俗言にては大抵同様の意味なり、此の他さほ種々の例はあれどもあがければ省きつ、大抵前に述べたる處を標準として平語の如何を知るべし

話術は小説などゝ違ひ客に向ひて直接に話すものあれば相手が貴き人あれば殊更らに叮嚀なる語を用ゐるの傾きあり、まして舊幕の頃には人民上下の懸隔甚しく寄席に出づる話術家などは大抵輕きものにして當人も自から卑下して叮嚀の語を使ふを常としたりしより今日に及べるなるべし、然るに話術家多くは無學なるを以て始りより終りまで一様に叮嚀ある語を使ふことあたはず勢不揃の語を吐くを免れず、中には客種の下等なるもののみ出逢ひ來りたる話術家などは甚しく野卑横柄の語を吐くもあり、ましてもとく下卑たる人か話術家にありたる類に至りて

は一層甚し、されば此の種の話術家を上品なる館に招き上品を誇る人々の前にて一席演せよと命ずる時は常に野卑横柄叮嚀混交にてやりつけたるものが一圖に聽聞者の費きを見て殊更らに叮嚀に話さんとなすものから話の語句調子外づれあどへも先へもゆかぬ様なことにありゆき日頃ろ丈けの技量を見る事あたはざるえ、是等は己か現に聞きたりしことあり、これ一には話術家の無學不熟練に據るとはいふものゝ話術として用ゐる語に一定の規則なきが故なり、貴賤の別なき平語を以て常に演し之を以て話の語と定めぬ時は前述の如き不都合なくて済むべし
次に平語といふは只に貴賤の別なき語といふ意味のみならず平々凡々の人よも分りやすき語といふ意味をも含む

此の笑面君
此の意を如し
此の意を如し
此の意を如し
此の意を如し
此の意を如し
此の意を如し
此の意を如し
此の意を如し
此の意を如し

と知るべし、即ち通俗の語をいふえ、話はもと和文、漢文を綴るにはあらであるべく多くの人に分り易く文字を知らざるが故に面白き小説を讀むことあたはざるものに至るまで容易に解し得る様に口述すべきものなれば今日の世俗に用ゐられざる雅言や四角の文字ばかりの書物よりぬきだしたる語などを漫りに使ひ片言の洋語などをしきりに用ゐられては聽聞者に於て之か爲め話のつゝき充分に分らざる爲めに面白味を害するえ、文章には通俗の語に赤き色々の熟字、助字、形容字などありて大に美術的の助けをさすものなれども話術は是等の助けを藉らざたい、通俗の語を以て天晴れ美術的に口述する處に特種專占の妙ありとす、己を以て見れば是れ最も大切なる點にして話術家の注意

すべき所あり、たとへば「上下ノ差別云々」といふべきを「上下ノケヂメ云々」「上下ノワイダメ云々」などいひ「悪クハナケレド云々」といふべきを「ケシウハアラチド云々」といひ「一ツ穴ノムシナ」といふべきを「同穴ノ狐狸」といひ「難義ヲシテ」といふべきを「苦楚ヲ嘗メテ」といひ「三階ノ家」といふべきを「三階ノハウス」といふ時は誰にも分るとは行かず、隨て是等の語あるか爲に前後のつきき工合面白からず覺ゆるを免かれず、尤も雅語、漢語、洋語等にも已てに世俗に用ゐ慣れたるものは差支なし、即ち「春ノ雨」を「春サメ」、「ハヤク」を「トク」などいふは大抵の人の知る所あり、「失敬」「運動」「昨日」「拜見」等は音讀にても分りやすし、「インキ」「ペン」「パン」の類は洋語の方反てよし、又茲に通俗の語とまで用ゐられざるもさりどて強

ち分りがたき語と稱すべきほどにもあらで優美なる語あり、たとへば「千代万代」「長閑」「白妙」等是也

上來述ふるか如く大跡話の地は平語を以てすべしといへども話中の人の言語は必しも平語に限ることあたはず、素と人の言語は其の人物をあらはすに最も密着の關係を有するものなれば其の人物をあらはすに必要なる丈けの言語は用ゐざるべからず、即ち其人の用ゐべき語を使ふべし、たとへば漢學者は多少堅き語を使ひ車夫馬丁は下等の俗語を用ゐる力士はつよく俳優はよはく男は男らしく女は女らしく老人は老人らしく子供は子供らしく口をきけばこそ其の人物を知るかれ、是等を一概に同様の平語を以て口述しては反て味ひなし、西洋人か日本語を使ふには「アナタ、

タイサンワルイアリマス」「ソレ、イケマセン云々」などいひ子供は「サヤウナラ」といはずに「アバヨ」といふものあれば話中に西洋人、子供を出して其の言語を述べんには須らく右の如くいふべし、是れ即ち人物を美術的に口述するの一法なり、但し如何に和學者、漢學者、洋學者の言語を述べればとて殊更に非常に六つかしき話のみを使ひては是も亦面白からず、たゞ一寸と聞きて如何にも和學者、漢學者、洋學者の如く感すれば足れりとする譯あれば此の邊は實地に臨みて斟酌するを要する也

唯雅俗男女老若等の區別のみならず場合によりては地方の語をも夫々使ひ分るをよしとす、たとへば京都の人から「サカヘ」「ソウドス」「アンシヤウ」「マ、ド、エ」などいひ鹿兒島の

人から「ビンタ、ウッタクラル、」「ヤマイモホリ」「イッキセン」などいひ仙台の人から「四時四十分」を「スツスツプン」などいふの類也、此の他百性の「アンダンペー」「東京子の「ペランメー」等中々多し、尤も話術家なりとて日本全國の邦語に通するは殆ど望むべからず、況んや西洋支那語等に於てをや、到底盡く眞に迫るといふ譯には行かざるべしといへども此の邦語を用ゐざれば其の人物をあらはすことあたはざる場合には殊更に耳立つ處丈けも邦語を以てするかたよし、即ち今日の落語家の假聲は田舎者といへば何處の出生にもかまはず、大概おあじ様に「アンダンペー」口調を用ゐるものあれば、殊更に耳立つ處のみを取り東京の聽聞者か聞きて如何にも田舎者らしく聞ゆれば是れにて可なり、總して美術と

いふものは必しも盡く眞に迫れるを取るとは限らず、大跡事物の精神を寫せば枝葉の事は差のみ眞に迫らずとも美妙の感覺を惹起すに足るものなり、此の故に今日の演劇を見るに必しも盡く邦語を以てせず皆同様の語を以てしてもよく熊谷の人物、敦盛の人物を美術的にあらはすにあらすや、是れ東京の見物人に對して熊谷の言語が如何にも表はつよくして内心に堪がたき情を含む様に聞え敦盛の言語が優美にして如何にも、無官の太夫のごとく聞ゆるによるものにして即ち兩者の精神を取りたれば、元來話術は眼前にある聽聞者の心に美妙の感覺を起さしむるを目的とする者なればあまり凝り過ぎて譯の分らぬ様を邦語のみを使ひては反て不都合なり、例へば鹿兒島人のごくく

純粹あるもの同士の言語を飽くまで眞に迫らしめんとする時は滑稽の話からば兎も角も別段鹿兒島といふ處に大切ある關係なく只だ人として其の細微なる人情をあらはすには反て面白からず聞ゆべし、何となれば話中の人の言語の意味分らねばなり、尤も鹿兒島人の聽聞者からば分りやすく眞に迫りて面白かるべしといへども東京人などに對しては感服するあたはず、故に東京人を聽聞者の位置にすゑて論を立れば前述の鹿兒島人が武士ならば東京の人が聞きて如何にも國の武士の如くに聞ゆる言語を以てすべし、要するに聽聞者の心は落入り其の人物をあらはす丈けの語を使用し必しも眞の邦語に限らざる方可なり、たゞへばやさしき女の心情をあらはすに其の女として幸に京

都の人ならば其の言語もやさしけれども若し蝦夷エゾの女子
 ならば其の言語おらくしきを以て東京人の耳にはやさ
 しき女子とは聞えず、隨て其の人物に附ての感覺も起らざ
 るべければ特ト蝦夷エゾの女といふ點ト必要なき以上は通例
 の東京の語の方然るべし、之レも反して圓朝が得意の鹽原多
 助の如きは上州語で述ぶるが故ト如何トも田舎者の律義リツギ
 らしく聞えて其の人物をあらはすレ、是等は殊更ト田舎語
 の必要あるものとして通例の東京語トしては味少し、又仙
 台の家老と薩州の家老とが其の邦語トて話をしたるト互
 も分らざるを以て終ニ謠うたにて應對トしたりといへる話など
 も同様特ト仙台語と薩州語とト味ひあるレ、然れども外國
 人の言語の如きト至りては之を其の眞の邦語トて述べな

ばよく聽聞者をして其の意味を解カしむることあたハさ
 るや明カかり、此の故に話中の人の言語ト殊更トらに必要トあれ
 は邦言を以てすべく殊更トに必要トあらざれば邦語ならぬ方
 よし、總てよく其の精神を考へ場合によりて斟酌トすべきな
 り
 茲に注意までにいひたきト話中の人甲乙相對トしたる時の
 言語にして一方たどへば乙の人の言語トいひ惡クき時ト甲の
 人か聞きとりて已トといひなをすか如くト演ずる事ト是あり、
 是レも必しもいひにくき時の事ト限らぬども話術家の中
 には京都人の言語トに不得手なるあり貴人の言語トに不熟な
 るあり、然るに話の筋にして京都人、貴人を引き出さレるを
 得ざる時に當り其の不得手、不熟の言語を多く使へば話の

味を減ずるの恐れなしとせず、故になるべく不得手、不熟の言語を使わずして分る様に演ずるを要す。此くせんじに不得手、不熟の人の言語を相手の人か聞きていひなをす様に述ぶべし、例へば甲が乙に向ひ「カウシチャ悪カラウカ」と問ふ時に乙か京都言葉で「イキマヘン」といふ處を甲の言語で「ナニイケナイカ」といひかふるの類之、此の他いひにくき言語の地語になをして述ふるも一法ありとす

總て話中の人の言語を述ふる時の話術家自身が其の人となりたる心にてよく其の人の精神をあらわす様に演ずること實に人物をあらはすに於て大切此の上もなき事也、話術家たる者深かく注意すべし

第二 言語を修整し適宜の形容潤飾を加ふべし

話の地の大躰平語を以てすべきこと第一の法則に於て説きたる通りなれどもさりとして話術として見れば通例の談話とは異り美術的の感情を起さしめざるべからざるか故に時々幾分か形容潤飾を加へざるを得ず、たとへば「空ハノコラズ薄暗クナリ云々」といはずに「空ハ一面薄墨ヲ流シタル如ク云々」といひ「峯カラ吹テ來ル風ニ花ガ白クチラトソノテクル云々」といはずに「峯ノ嵐ニチル花ハ吹雪トミマガフバカリ云々」といひ「其ノ時ニ丁度鐘ノ音が聞エテ一層アハレデス云々」といはずに「折柄鐘ノ音モ諸行無常ト告ゲワタリヒトシホアハレヲソヘ云々」といふ時の何となく面白く聞ゆるものあり、又話術は口述するものなれば文章の如く「ケレバ」「ケリ」「ナル」「ツル」而テ「夫レ然リ」といふ語を

以て前後を結ぶものよはあらされども時よよりては文章の如き口調よいふ方反て味あることあり、素より「宗吾の江戸ニ行ケレバアトニ残りシ妻子ハイタクナダキケリ」などいふべしといふよはあらず、「昨日トクラシ今日トアカシアダニ月日ヲ送クルツチ云々」「思ハズ見カハス顔ト顔云々」「先ヘ一足後ヘ一足往キツ戻リツ云々」等の類也

此の外餘り長すぎなどして工合悪きものは省きて調子よき言を用ゐざるべからざることあり、たとへば「云々デアリマス」といふ語の如きは演説などの速記よは多く見かくる語あれども場合よよりては調子の悪き語也、「妙ナモノデス」といふ處を「妙ナモノデアリマス」といひてハ口調長たらしくしてれもしろからず、少しの事で「云々ガアリマス」といふ

方は「不都合なし」「茲ニ一ツノ話ガアリマス」といふの類也、「今ニモフツテクルダロウトオモハレマスル空合」といふ時は如何よも長たらしければ「今ニモフツツウチ空合」といふ方調子よし、是等の類例は中々多くして擧げ盡すことあたはず、次に話の中へ「ソレカラチ」「アノ」「ソノ」等餘計な語を挿むが如きは子供どうしのはあし、所謂話術よはあるまじきこと、總してむだな語を入れぬ様よすべし
又前よあげたる「千代万代」「長閑」「白妙」等の語は地語の修整よはよき語也、「君カ齡ハ千年万年ノ末マデモ云々」と音で述ぶるよりは「君カ齡ハ千代万代ノ末マデモ云々」と和訓よて述ぶる方優美よ聞ゆる、話術は盡く優美よすべしといふよはあられど優美の處は優美よ述ぶるをよしとす、場合よよ

りては「真白ナ雪」といふよりは「白妙ノ雪」といふ方聞えよし、
 上品ある話の中は「雪隠へハイリ云々」といはい何となく下
 品な聞ゆるを以て「廁へハイリ云々」といふべし、此の如くあ
 れば話の場合よりて言語を斟酌せざる可らず必要あれ
 ば強ひて平語ならずとも可なりと知るべし、さりながら「火
 事ニアフ」を「回祿ニ遭フ」といひ「味方スル」を「左袒スル」とい
 ひ「藝者」を「校書」といひ「役者」を「梨園」といふの類は面白からず、
 何とあれば是等は別段六つかしくいひたればとて地語の
 修整もならず反て何の事やら分からぬ人多ければ之、さ
 れば平語ならぬものを使ひたき場合も成るべく廣く用
 られて分りにくからざるものを選びて用ゐべし、やたら
 ん六つかしき語を用ゐてひとりよることぶは話術の本旨よ

隴云、落語
 は一時に
 の興に供
 る物、此
 るも此丹
 るあり文
 るもその
 りそめに
 しき取る
 なし限る
 なり

あらず、之を要するに話術と稱して一派美術の中より位する
 からは日常の俗談平話と同一にあらざること勿論あれば
 よく場合を考へ言語に注意し之を速記すれば自から句を
 なし章を作りほどよき言文一致の文として讀み得らる
 べき様に口述すべきなり、圓朝の話聞きたる者は其の語
 の使ひかた整ひ居るに驚かざるはあし、之を速記すれば兎
 に角く自然に文をあすに感せざるはあらず、己は圓朝の話
 を以て盡く服すべきものとなすにあらねど今落語家中
 はいふに及ばず講談師中に至るまで地語の整ひ居るは圓
 朝を以て第一とすべし、己が聞く處によれば圓朝は其の話
 を公然演ずるまでには幾度か話の趣向、言語の使ひかた等
 を練るよしなるが是れ話術としては實に緊要あることな

り
 諺ことわざや喩たとへなども適宜に入るゝ時は一寸したる事も面白く聞
 に地語の修整を助くることあり、「燈臺モト暗シ」「ヤブ蛇」「餅
 ヤハ餅ヤ」「馬ノ耳ニ念佛」「論ヨリ證據」「岡目八目」「サハラヌ神
 ニマヽリナシ」等の類は差のみ分りにくき事にもなく日常
 の談話にも往々用ゐるものにして中々に味ひあり、諺や喩
 などを用ゐる時は反て事件を説くに分りやすく聴聞者の
 感覺を強うする事あり、但し餘り六つかしき諺や喩などを
 用ゐては其の諺喩を解することあたはざる故に聴聞者に
 取りては反て分り悪く前後のつゞき面白からず感ずる也、
 例へば「宗襄の仁」「遼東の豕」「猷芹の微意」「跖犬吠堯」「尾大不掉」等
 の類は少しく四角なる文字を讀みたるものからでは一寸

分り悪し、分り悪くては諺喩を引きたる詮あし、又物知り顔
 に六つかしき諺や喩を引きて之を説明するが如きは話の
 本筋を妨げ眞に餘計なる事なり、大抵説明せすとも分る位
 のものを引くべし、此の外猥褻な喩や野卑な通言などは使
 はざる様にすべし、是等は一寸したる事の様あれども爲め
 に話の品格を下くるものなり、諺喩の外古歌俳句なども引
 用して面白味を添ふることあり、分けて古歌などは話のは
 じめにあくも話の中へ挿むも何となく話の品を上ぐる様
 に聞ゆるべし

前段の論どひとしく事物の形容なども人の知らざるもの、
 知れがたきものあとを取るはよろしからず、前に擧げたる
 如く「峯ノ嵐ニ散ル花ハ吹雪トミマゴフバカリ云々」といふ

時は誰も雪の風に吹かるゝ様を知るが故に心に其かど感
すべけれども之にひきかへて音のよき者を形容して「迦陵
頻伽ノ鳴ク如ク」カといふ時は素と迦陵頻伽とは如何なる
聲の鳥か知る者あきを以て感覺薄し、「鶯ノ鳴ク如ク」とても
形容せば分りやすからん、但し世になき者にても繪畫、人形
などにてよく人の知れる者は之をかりて形容するも不
都合なし、即ち「顔ハ閻魔ノ如ク」カ「姿ハ達摩ノ如ク」等の類は兎
に角く「閻魔達摩」は兒童に至るまで其の顔容を知るもの故
怖ろしき顔色手足のなき様を聽聞者の心に感せしむるに
は差支あし、畢竟話術の形容は聽聞者の感覺を強よむる爲
めに用ゐる譯あれば實際正物か世に亦くとも聽聞者の心
に感ずるものならば可なり、前の「迦陵頻伽」の如きは繪畫で

見ても聲は聞えざるを以て之を聞ざる聽聞者には感覺薄
からんとおもふへ、又形容も大抵程合のあるものにて餘り
に形容に過きては反て耳障りとなりし、よく場合を考へ特に
形容を要すべき點の外は之なき方可ありと知るべし
次に地語の修整をなすには重言を用ゐざる様に注意すべ
し「箱根山中山中テ馬カラ落テ落馬シテ云々」はいふまでも
なければ下手な言文一致脉の文見る様にむやみに「マスマ
ス」「マセン」等の話を用ゐるか如きはよろしからず、口述する
方は文章ほどは耳立されども餘り「マス」「盡しや」「マス」「盡して
は語勢に變化なくして倦みやすし」「マス」「ヤ」「マス」の語を以て
切らずとも他に切り方はあるものへ、たとへば「思フ様ニハ
ナラヌモノデス」といふ處を「思フ様ニハナラヌモノデ」とい

へば可なり「テ」の語り中々工合よき語あれども是とても屢々重ねて使ひては面白からず、此の他「テ」の語「ナ」の語等を副へて切る方あれど茲には畧す、兎に角前後の工合を考へ一語の重り合ひて耳立ざる様に述べざるべからず、今一つの注意までに引き度きは話術家によりては餘りに「然シナカラ」といふ語を以て後を起す者あれども是は「ケレモトハイフモノ」、「尤モサリナガラ」等種々の語あるものなれば重からぬ様に述べたき事あり、此の外講談師の中には「則チ」盡しの癖「遂ゲル」盡しの癖ある者あり「眼下ニ見下シ」信州信濃「などいふ重言は語音が異なる丈けに差のみ耳立されども前に引きたる如き同音の重なり合ふはことに耳立つあり

龍云、落語家はまこと重なりを重なりといふにふりて此評者なり、無きか、外心持

第三 言語の音調に注意し一調子に流れざるを要す
 話は普通の音曲の如き節を附するものにはあらざれどもさりどて日常の談話にても音調によりて聞く人の感覺を異にするものなれば况んや話術としては音調の事たる最も大切あり、あらくしき事は之を述ふる語の音調もあらくしき勢ひなかるべからず、あはれあることは其の地語の音調もあはれ氣に聞えざるを得ず、あなむ語を以て述べても聴聞者をして真にあらしく真にあはれに聞へ美妙の感覺を起さしむと否とは唯音調の如何にありといふも不可なし、たとへば「ガタ々々々々ガラ々々々々」など地震の有様を述ふるに「耶穌の祈りの様に沈みたる聲にていひ、山寺ノ鐘ハ陰ニ籠リテポーソ」などと真夜中の物寥しき様

を述ぶるにホロ酔氣元まの調子にていはし少しも情は移らざるべし、落語などは洒落に至るまで極りたるものもありて誰かはなしても筋はあきなれども下手が演ずるものと上手が演ずる者とは音調の如何によりて面白味に大差あるなり、是れ恰もあきじ語を以て綴りたる仙台裁にても音調の巧拙によりて淨瑠璃語りの上手下手あるとひとし、もとより身振りなどに至りても巧拙はあるものなれども第一に音調の巧拙に關するものとす、話術の身振りは躍りの身振りとは異なり多くは言語と共に出るものあれば言語の調子巧ならざれば面白味少きし、音調の大切なる事此くの如くなれども世には一種の音調のみ巧にして之にのみ沈み流るゝ話術家あり、たとへば物あはれなる音調にのみ沈

みて勇壯活潑ある音調を欠くが如き類にして是等は俗に所謂一本調子にて倦みやすし、よろしく事件の如何によりて夫れ相應なる音調に口述し抑揚波瀾を生ずる様に注意すべし

話中の人の言語に至りては音調の大切なること此の上なかるべし、人物をあらはすには人の言語を以て第一となすものなれどもあきじ言語にても其のいひかた音調にて人物に大差あるは讀者が日常の實驗によりても明かあらん、腹立しき折には言語自から角立ち音調高くして如何にも怒れる如く憂ふる時は言語やはらかにしまりあき様にて音調沈み、可笑時ハ音調高く、ども怒れる時の高きとは異なり、眞に可笑しくして笑ふ時、人をひやかして笑ふ時、媚ひて

笑ふ時等あぢ「アハ、」ノ笑ひかたにても音調おなじからず、男の驚きたる時の語勢、女の驚きたる時の語勢、子供の泣きかた、年寄の泣きかた、番當の返事、小僧の返事、都府の人、田舎の人皆音調に差あり、此の差あればこそ聽聞者に於て話中の人物如何を知るを得るなれ、男も女も子供も年寄もおぢ音調にては面白からず、如何にも小説おどにては別に音調の變化を示すことあたはざるを以てたゞ言語の性質にて前述の差を示すものなれば敢て音調の差は必要なきか如くなれども是れ素と書き物故に止を得ざるに出るものにして若し音調の差を示すを得ば此の上もあきことならん、既に之を示す爲めにいろく工風を凝らす者さへある位之、話術は之れをあらはすに最も適當あるものにして

龍云、嗚呼
古今の大家
此論を破る
べき音楽は
なき

是れ實に小説に優れる點なれば折角のよき所を捨つるが如きはあもはざるの甚しきものなり、「エヘン」といふ一聲の咳せきでも其の音調によりいろく聞ゆるなり、「アナタ明日上野へイラッシャルカ」といふ問の語にても殊に「アナタ」の語の音調を高くつゞ込みていへば他の人は兎も角「アナタ」といふ處に重みあり、「明日」といふ語に音調をつよくすれば「アナタ」には關係少なくして「明日」といふ所に意味あり、「上野」といふ語に音調を殊にすれば他の場所に行かず「上野」へ行くかといふ所に問の眼目あり、されば人の問答談話などの中にも音調の如何によりて互に判斷することありとす、「ホントデス」といふ語の終りを上くれば問とあり下ぐれば答とある、「ヨウゴザイマス」といふ語も音調により承諾の意とも

なり「オホキニオセワデス」といふ意にもある之、是等の例を
 擧ぐれば中々に多く到底一小冊子の盡すべきにあらず、話
 術家たる者は各種の人の言語の音調に注意すること肝要
 なり、此の點に於ては今日の講談は落語より劣れるあり、圓
 朝の話の面白き所は第一に人の言語の音調巧みなる所に
 ありといふも不可なからん、然れども勇壯活潑の音調に至
 りては講談の得意とする所にして落語家の及ばざる所あ
 り

音調の大切なること上來説くが如しといへども言語の續
 きかた惡しきものは音調も亦よろしからず、前にも例を出
 したる通りあまり長たらしき語や餘計な語、重なりたる語
 は音調眞に惡し、尤も話中の人にしてかゝる言語を使ふ癖

ある者などをあらはす爲めならば致方なければども左なく
 ば成るべく音調の工合よき語を撰むべし、是れ亦音調に就
 て注意すべきことなり

第四 言語と共に適宜半身の動作を加ふべし

事件と人物とを美術的に口述せんには言語の修整、音調の
 みにては不充分なり、言語と共に身振りをなし聽聞者の感
 覺を強めざるべからず、話は聞くのみにあらず多少話術家
 の身振りを見て面白味を覺ゆる之、之を動作といふ、動作と
 は話中の人の身軀、手足、顔面等の作用はもとより自然の事
 物の形容模様などを一寸手先にて示す等に至る迄でを
 含蓄する之、身振りといふ時は人の上にのみかゝりて事物
 の上に係らざる様に聞ゆるの恐れあるを以て廣く動作と

はいへるこ

人として事に觸れ物に當り多少の動作あるは讀者が日々知る所あるべし、可笑時は目元、臉等に皺よりて齒をあらはし、怒る時は眼尻上り額に八の字を作り、悲しければ袖を眼にあて、うれしければ手の舞ひ足の躍るを知らず、是等は皆殊更らになすにあらざり人の情より自然に發するもの之、さるを以て口をあきて暫時止らされば驚きたるを知りうつ向きて手を額にあてがへば困まれるを知り腕込をすれば考へるを知る之、高き山より谷底を見下せばおもはずあどひさりをあし走しるには自然兩手をふる等言語なくして動作のみなすと少からず、素より物いふ折には何かしら動作ある之、をかしき事はわらひあがら話し悲しき事は涙を

流しなから話すの類之、既に此く人の常情として動作ある以上は話術としては素より之をあさいるべからず、話中の人が悲しき事をいふ時もうれしき事をいふ時もひとしくたゞ物いふのみよて動作なくば如何も音調も巧なりども聽聞者の感覺薄すからん、涙をぬぐひあがら悲しき事を話す時は如何も眞も迫るのちもひありて其の人物の如何をしるべし、あち泣く中も空泣きと眞泣きとは人物をあらはすに於て大差あるものなれば動作の巧拙より人物をあらはすの巧拙ありといふべし、此の故も話中の人物はへば其の動作をあし戦へば其の動作をあし轉べば轉べはへばはひ必要丈けの動作をあすを要す

次も自然の事物をあらはすにも動作を以てする時は一層

聽聞者の感覺を強うする之、例へば荒濤のうちよする處を
 述ふる時は手先をまはしてあらなみの圖を示すべし、たゞ
 「荒濤がド々々々ト云々」と云ひ放すよりは「荒濤が」のあと
 に手先を動かかしながら「ド々々々」といふ時は如何も荒濤
 のすさまじき様に聞ゆる之、「見渡スカヤリ一面ニツト野
 原ヲ」などいふ時「ツ」といふ處へ手をのばして眞一文字
 をひく様よし平赤様を見する時は一層聽聞者の感覺を強
 うすべし、丸き物は丸く四角き物は四角く大なるものは大
 きく少なきものは小さく夫々動作を以て示すを要す、適當
 の音調を以て口述し聽聞者も於ても其の何たるを知る處
 へ動作を加ふるを以て二本の手先きも實も其のあらはし
 たる正物を見るが如きの思ひをあす之、試み圓朝の話を眼

を閉ちて聞く之圓朝を見ながら聞とひきくらべあば動作
 の必要あるをしらん
 動作の欠くべからざること此の如しといへどもさりとして
 動作あまりに多くばしつこくして反てよろしからず、總て
 話中の人の動作の如きは通常見る所位の動作に止め大坂
 の役者を見る様に殊更らに動作をしつこくすべからず、又
 自然の事物をわらはすにも些々たることに迄で一々手先
 をうごかさず大抵の處にて止むべし、例へば通常の人なら
 ば首をふらずともよき處をわざ／＼首をふり、「右ノ方ニ石
 燈籠ガアツテ左ノ方ニ松ノ木ガ二三本下草ニハクマ笹ガ
 植リ云々」と唯一通り庭の躰裁をのふるにあたり兩手を横
 に廣げて燈籠の形を見せ拳を作り腕を上げて松の形を示

し掌てのらを開きて笹の形をあらはすなどは中々にうるさし、故に場合を見斗ひ適宜に動作を加ふべし、尤も適宜といふ語はぼんやりとして分らざる様あれども素より術といふ者は臨機應變なるものなれば一二例を擧ぐるの外は到底本書に於て千百の場合を盡く示すことあたはず

只動作の多きに過ぐるを不可とあすのみあらず動作にしてあまり仰山なるをどらず、演劇にては走る時は全く走り臥す時は眞に臥し立回りには白刃をひらめかし女の所作には女の姿をなすものなれども話はもと話にて演劇にあらざるを以て如何に動作か大切なりとて圓朝が高座より飛び下りてかけだしたり如燕が白刃をひらめかして立ちさわぎなどしては話の續きよろしからず、素と演劇にては

夫々多人數の役者ありて一役一人にて演ずるを以てかけだしてもあとの人の所作も見え立回りにも兩人の有様別々見ゆれど話術は一人にて演ずる故動作を手輕くしてかけ出す人もなりあとも残る人もあり切り込むものもなり受くるものもなりやすからしめざるべからず、且の演劇よては「チヨボ」といふものありて事件の行きたてを説明する事あきまあらねど是は常又は用ゐられず大抵は目前より事件を見せて敢て他より説明せず、故もありし丈けの事件は仰山も見せざるを得ず、然るに話にては大跡の事件は言語を撰び音調に注意して之を述べ聽聞者の心に感せしむるものあれば仰山ある動作をなさずともたゞ大切ある精神丈けを取りて聊か其の形を示せば眞に其の事

曉云、白粉
を用いて以
下實の精神
を言ひ盡し
たる言葉さ
いふべし話
術家なら人
は此意味を
よくし合
點すべし

件を見るが如くに感ずるゝ、是れ演劇と似て異なる點あり、
要するに事物の精神即ち眼目といふ所を寫して動作をさ
せば可なり、彼の薄墨の一筆書みて人と見え鳥と見ゆるも
たゞ人、鳥の精神即ち眼目といふ處を寫し得たればあり、此
の精神を得る事何術よてもかたし、話術よてい走る時はた
ゞ兩手をふり膝を少しく上くる位にとゞめ立回りには扇
を以て白刃となし顔色も注意し半身を延ばす位に止むべ
し兎に角一寸見て如何にも其の様子をあらはし居れば可
あり、故にまづ半身の動作と定めたるゝ、又道具ともいふべ
きものは手拭と扇位に止め是れにて巧に動作を助くべし
白粉を用ゐて白く見せ鎗を提て鎗と見するは何人をも出
來るゝ、炭を欺く話術家といふて雪を凌ぐ美人の如くに見え

一尺も足らぬ扇を以て大身の鎗かどおもはむむるこそ一
種の技藝といふべきなれ

第五 話中の人の言語及び話術家の動作等にて事件
をあらはすに足るものは殊更らに地語を以て
之を述べべからず

小説にては事件も人物も一切文字を以て之をあらはさざ
るを得ざれども話術は直接に聽聞者に對して口述する者
なれば怒れる時は大聲を發し悲む時は涙をぬぐふの状を
かす等わざ／＼「大聲デイヒマス」どか「涙ヲ流シマス」どか地
語を以てことばらずして濟むゝ、たとへば小説にては「云々
トイ、ツ、涙ヲヌグヒ」といふ處を話術にては直接に動作
をなして其の様をあらはす、之を以て小説にては盡しがた

龍云、是實に話術にのみ附屬せる便利あり

き處も話術にては之を致すを得ることあり。是れ小説と話術と異なる重なる點、然るに話術に於てわざと地語を以ていひあらはすは重複となり反て味を損す云々トウルミ聲デイヒナガラ涙ヲヌグヒ」と口述しながら涙をぬぐふの様をなさんより「ウルミ聲デイヒナガラ涙ヲヌグヒ」の十五語を省き「云々」といふうるみ聲と共に涙をぬぐふ様を示すときは真に迫るのちもひ一層深し、尤も話は演劇とは異なるもの故一切地語を以ていひあらはすべからずといふにはあらず、たゞ前後の工合により殊更らに地語を以ていひあらはしては或は勢ねけ或はしつこき場合には省ふくべしといふのみ、今一例を示して之を説かん、落語に江戸子の「ガサツ者が家主の宅へ這入り尻をまくりて座るといふ

龍云、此に至りて寄席に圓洲を出しすといふべし

段あり、此の場合には大跡江戸子のセカくして居る處を口述する譯なれば「真平御免ンテイトイヒナガラ尻ヲマクツテ座リマスカラ家主ガナンダ尻ヲマクラズトイヒシヤナイカ云々」と口述して尻をまくる真似をしては調子長たらしくしてセカくしたる様子をうつすには不可、それよりは「真平御免ンテイトイ」と述べながらたゞるつと勢込んで尻をまくりて座る真似をあし之を見て家主が「ナンダ尻ヲマクラズト云々」といへば充分江戸子が尻をまくりて座りたる事は分るのみならず如何にてもセカくしてガサツ者らしく見ゆるべし、

第六 人の容貌、所の有様等を顯はすには場合により

疎密適宜に有の儘を述べ漠然たる形容を以て

すべからず

地語には形容潤飾を要すること第二の法則に於て説きたる通りなれども場合によりては形容なく有の儘を述ぶる方反てよきことあり、たとへば土地の景色などを述ぶる時に只「其ノ景色ノ美シサハ畫モ及バズ」どのみいひては山が
 高きやら低きやら谷があるやら海があるやら少しも分らず、又家宅の模様などを述ぶるに「實ニ立派ナリハ金殿玉樓ト云フモオロカナ位デス」といふのみにては三階作りか五階作りか木造か石造か一向に知れず、此くしては聽聞者の心中に大凡そ此の如き景色此の如き家宅といふことをあらはすことあたはざるを以て感覺薄し、是等は宜しく有りの儘を述ぶべし、又人の顔かたちをあらはすにも「眼ハ細ク鼻

有の儘は五
 月蠅の如く
 しあるは肝
 さの灸を肝
 腎の灸を肝
 話の灸を肝
 事の灸を肝
 色白く目す
 へは美人の
 あらばるの
 如く重なる
 如く重なる
 さいだして話

ハ高ク云々「脊ハステラットシテ色ハ白ク云々」など、大凡その處を有肺に述ぶる時は聽聞者をして大抵其の人の容貌を知らしむべし、容貌を知る時は其の風采を知るゝ便之「眼ガキヨロ／＼シテ云々」といふ時は何となく其の人物の鋭とろとき様を推し「眼尻ガ下リ口ニベリガナク云々」といふ時は大方抜作おらんと考ふるやと之を今日の實際より引合して見ても中々面白し、以上説く所の事は近頃小説社會に於ても大に論ある事として必しも話術のみは限らず、尤も小説又は繪畫の助けを借る事を得べけれども話術は此の助けなきか故に一層前より説くところの事の必要を覺ゆるなり尤も餘り小さき事まで一々有の儘を述べ立ていはうるさき様は覺ゆるものなれば此の邊は實際家の宜しく斟酌

すべき所としておらかじめ判然たる限界を理論上より定めがたし

第七

漫り又猥褻、野卑、残酷等の事及び話の筋勸悪の恐れあるものを述ぶべからず

小説云、予は
も酷しき事
は好ましき事

話術は素と人の娛樂の一法として存するものなれば必しも盡く眞又迫らずとも可なり、寧ろ眞又迫りては不都合ある事あり、第六の法則又於て有の儘を述べんことを説きたるを以て一切有の儘を述べて眞又迫らしめんとするは法則を誤解するものなり、場合又よりて有の儘を述ぶるを要する折又は飽くまで之を述ぶべしといへども場合又よりては述ぶべからざるごとあり是れ即ち本則を設けし所以なり、眞又迫るを以て必ずしも美術ありとすることあたは

しらす思ふ
人よ無識の
すべき話よ
於てはまこ
美の笑面君
會全家の如
ふを心録
して如何な
見ても害の
なきやうし
著述すべし
(話すべし)

ざるは畧ぼ定まりたる論の様なるが如何又眞又迫りて聴聞者の感覺を強めん爲なりとて親子など又は聞くよたへがたきほどの猥褻ある事件を細かに有の儘を述べ動作を示しなば如何なるものぞ、虎烈刺病にかゝり嘔吐し下痢する様を有の儘に述べ其の眞似を致さば如何なるものぞ、鋸びきの刑にあひたる處を其の儘に述べ切られ様を示さば如何あるものぞ

猥褻ある事を述ふるは壯少の男女をして兩性に關する道徳を紊亂するの媒とありやすく而かも親子兄弟の如きはあもはずハット赤面して娛樂も反て娛樂とあらざる事なきを保せず、尤も男女の情の事は小説などにも大抵之あるものにて人をして感せしむるには屈強の具なること己亦

職云、人情を
寫さうと思し
て、少くも猥
褻なき思ふま
じき思ふま
も、家の外に
術家は皆美
れ、意にあら
結果を生ず
べし

職云、實際
に、話をし
く、前を
口、前に
し、かた
面白くす
所、以て
兵衛、八
話、なれば
者、が話
も、人が
也、笑ふ

之を知るといへども其はたゞ情なり、此の情を寫さんには
他にいろ／＼ある手段あり何ぞ殊更らに猥褻手段を要せ
んや、話は男女の情に關することを述ふべからずといふに
はあらず、たゞ猥褻聞くをいとふほどの事件は避けて述べ
ざるをよしとするのみ、たとへば「臥戸ヲ共ニ致シ云々」借老
ノ契リ云々」といへば猥褻には聞えぬども之を有の儘にい
ひかへたらんには此に例に書くさへいとふべし、總ていひ
方によりては猥褻ならずとも其の意の聽聞者に感通する
を得るものなり、是れ話術の妙ある所に於て話術家の注意
を要する所なり、此の點に於て今日の話には頗る改良を要
する所あり、分けて可笑味を専らとしたる落語の類にいた
りて實に甚しき者あり、おもふに人を笑はすには猥褻の事

を以て最もやすしとするよりの事ならんがやすき事を以
て人を笑はすの一の術として稱する丈けの價格なし、猥褻
の事にあらずともいひかた次第にて中々に可笑しき事あ
り、眞の可笑味の猥褻をいなれたる處にありとす
嘔吐したり下痢したりする様を有の儘に述べ其の眞似を
されての酒席などにての一層聽聞者の心地を悪うする之、
あまり甚しきに至りての娛樂を通り越すに至らん殘酷な
る有様あどもあかじ、分けて女、子供などの之か爲め二三日
の食も進まずといふ様なる事に立至りての害あるの甚し
きものといふべし、是等もいひかたによりてたゞ聽聞者の
心に其の事の大躰を感ずる位に止むべし、全躰の話の猥褻
にあらず野卑にあらず殘酷にあらずとも其の事件中一部

翻云、たさ
ひ勧善懲惡
を究風ふり
さするも只
娛ますさい
ふのみにて
聽て喜び、
怒りふみ、
笑ふ中に
品のつから
品なる感じ
を起さしむ
たるやうに
たしむ

分けても猥褻、野卑、殘酷等の事を述ぶる時のそれのみにて
話の全部を傷くるに至る、少々の事にてもある丈け注意し
如何にも一種の美術ありと稱さるゝ様に心掛くべし、又た
どへ一部分に道德に悖らざる事ありとも全体的話の筋
にして非常に道德に反し之が爲め無學の聽聞者をして勸
惡の弊なきを保せざるもの述べる事と定むべし、論者
或の云ふん話術の話術にして道德の講義にあらざり何にて
もつまり人をして娛樂を感せしむる様に口述すれば可な
り何ぞ殊更に勸善懲惡主義によらんやと、如何にも廣き論
なれども聽聞者にして自ら是非善惡を判し決して他人の
話の爲めに誤る事なしといふか如き人々ならば一時の興
として聞くもよからんが今日の實際を見るに話術家のい

ふことを信じて盡く之をよき事の様におもふものも少か
らされば若し話の筋として甚だ道德に反したる事ならん
には勸惡の恐れあしといひがたし、此くての害をなすも
のよして未だ話術を以て善良ある娛樂の具となすことあ
たはず、己と雖ども話術を以て必しも勸善の具とのみ定む
るよはあらずたい勸惡よならぬ様よしたしとおもふのみ、
勸惡の恐れあき事よても面白き話は澤山あり、わざく危き
ものを撰ふよひ及ぶまじ

第八 滑稽洒落等は臨機應變あるを要す

滑稽洒落なども考ふれば考ふるほど益味ひを出すもの
もあれども所謂しんみりとしたる事と違ひ一時聽聞者の
笑ひを買ふ爲め用ゐる事多きものなれば常と判みて押

手際也譬へ
しは此所宜
問の滑稽の
つては、
家來某が直
言を述ぶる
時一御先祖
榊原某公云
々さいつて
云事な、斯
しなと大い
察せらるへ
きを悉く省
要す三時を
を三十分を
まりに十分
し終りに予
し足る感ぜ
満はめらた
に是雄辨法
に見言ふ者
下に論すや
の事ト及ぶ

前にも述べたる通り話の本筋に附着して離れがたきものは如何ともすべからざれども只話の間に挿むものならんには前述の注意頗る緊要なり此の事は只に滑稽洒落のみにはかぎらず例^たちどを引く場合にも同様なりと知るべし

第九 愁嘆鬪争等を述ぶるに際し漫りに滑稽洒落を混じゆべからず

此の頃の講談落語には愁嘆の場に滑稽を入れ鬪争の處へ洒落を挿むなど往々あり是はよろしく改めざるべからず、たとへば櫻井の驛で楠公が正行に分かるゝ處を述ぶるにあたり茶番狂言の子分れ見る様にては少しも精神をあらはさずどこまでも天下の忠臣が最愛の子に分れ表面に涙を流さゞれども内心無量の情を含む處を顯すべし一言半

句一舉一動に至るまで最も此に注意を要する之、聞く方にも愁嘆の情に胸せまりおもはず袖をうるほふす處へ一寸可笑味なる事を入れられては之か爲め感情前後混亂するを以て話術として人情を感ぜしむるの力減ずる之、此くては話術家に取りても損ならずや、尤赤垣源三が兄の宅へよそながら暇乞ひに来る處などはもと復讐^{かたき}の暇乞ひと見えざる様に酔ひまぶれての事故反つて處々滑稽を要する方にて是等は始終眞^{まじ}面にては面白からず、たゞ甚しき滑稽を入れて如何に酔ひまぶれても苟くも後世義士とよばるゝ赤垣とおもはれぬ様にては不都合なり、又あまり愁嘆のみにて聽聞者の心沈みて反て不愉快の感を起すの恐れある時は其の愁嘆場の後へ可笑味の事や華やか物^{かぶ}を述ぶ

るはよし、兎に角く愁嘆場としてはどこまでも眞面目に行
くべし、但し元來滑稽筋の愁嘆、鬭争などは滑稽洒落あどの
這入る方反て面白し、たとへば涙の代りに唾つばを附し、劔の代
りに摺すり子こ木きを用ゐるの類なり

第十 引事其他枝葉にわたりて話の本筋を亂すべか
らず

凡そ一席の話には眞目ある事、可笑しきこと、歴史的、假作的
に論なく本筋と枝葉とあるもの之、如何ある話にても唯本
筋のみを述ぶる時は興味少なし、多少枝葉の事も附加へさ
るべからず、此の故に第二の法則に於ても説きたる通り諺
や喩なども入用あり、若し單に本筋のみを述べたらんには
加賀騒動の如きもたい大槻傳藏といふ家來がお貞の方と

いふ主君の妾と通じて出來たる子を主君の相續人となさ
ん爲め淺尾の局といふ老母と謀り主君を害したる云々と
いふまで之、此くてはわざ／＼木戸錢を拂ひて講談を聞く
には及ばず、本筋は此の如きものにて種々枝葉の事ある
を以て十日や二十日聞く丈けの直打あるもの之、然れども
話の枝葉を附け潤飾をなさん爲めに故事などをひきて長
々しく之を述ぶる者あり、是は既に今日の講談師中にも禁
物とあし居る者もあれども兎角にやりたがる者あり、生學
者などにも少しく事を知る時は己の學問を顯さんが爲め
に餘計な處へ引事をあし先進學者の説などを擧ぐるもの
多し、人情皆一つと見えたり
抑も枝葉なる者は話の幹ともいふべき本筋に附して潤飾

痛し、少々

とあり扶助となるものなれば何處までも本筋は亂れざる
 様に立て、聽聞者をして如何にも面白き話ととおもはし
 むるを要す、然るに引合ひに出したる故事や喩などを長た
 らしく説き明す時は前に聞きたる本筋の關係を忘れ反て
 引事の方が本筋かとおもふ様に聞え前後錯亂して纏りた
 る話とはおもはれぬ様にあり隨て話の感覺薄し、ましてや
 種々の引事を屢々出されなばいよ、本筋を失ひ何が何
 やら一向に分るまじ、今一例を示さんに、い覺勝五郎の話^いを述
 ぶるに、勝五郎モトウ、覺トナリマシタガ仇ヲ打トウト
 云フ心モチハ少シモクシケマセン、昔普ノ豫讓ハ其ノ主人
 ノ智伯ガ趙襄子ニ伐レタノヲ遺感ニオモヒ如何ニモシテ
 智伯ノ爲メニ仇ヲ報センモノト躰ニ漆ヲ塗ツテ癩病ノ如

クニ見セ炭ヲ吞ンテ嘔トナリ姿ヲ變ヘテ襄子ヲ附ケテラ
 ヒ云々、又越王勾踐ハ吳ニ攻メラレテ會稽山ニ閉籠リ終ニ
 降參シタルヲ深ク心ニ掛ケドヴガナシテ會稽ノ耻ヲ雪ン
 モノト常ニ苦キ膽ヲ側ニオキ明暮之レヲ嘗メ自身ニ耕作
 ナナシ夫人モ自ラ織機ヲ織リ云々、是レ皆一心ノ凝ツタル
 處デ中々出來ナイトデス、又初花モ勝五郎ガ覺ニ成ツタカ
 ラトテ薄情ニモ見捨ルヤウナトハシマセン、此ウナルト大
 抵ナ女ナラ他ニ男デモ拵シテヘマスガコウ云フ處カラ覆
 水盆ニ返ヘラズト云フ諺ニモ當ルコトが起ルモノデ、トイ
 フノハ昔周ニ太公望ト云フ人ガアリマシテ前ニ其ノ身ノ
 貧シイノヲ見限リテ妻ヨリ離縁ヲ申シ込テ出テ行キマ
 シタ處ガ後チ周王ノ師ト仰ガレル様ニナリマシタノヲ聞

龍云、四朝
の枕と本題
との關係は

キテ先ノ妻ガモトノ通りニナラントイツタキニ太公望ハ
先妻ニ盈ノ水ヲ大地ニアケサセテ其ノ水ヲモトノ通りニ
盈ヘ入レタラバ其ノ方モモトノ通り妻ニセントイヒマシ
ク云々といひたらんには日本の話をするのやら支那の歴
史を講ずるのやら分らぬ位のものなるべし、此の外勝五郎
が非人の中に入りたる處を述べればとて他の非人の身上
かどを一々くはしく説くにはおよばず、一通り非人らしき
有様を述べれば可之、次に又枕と稱し話の本題を述るに先づ
ていろ／＼の事共を述ぶる事あり、是れ必ずしも欠くべか
らずといふにはあらぬとあどし話あどには殆んど必用に
して大に興味を添ふる之、分けて圓朝の如きは中々に甘き
事をいひ知らず／＼本題へ引入るゝ事あり、されど是とて

竹のや主人
の冒し本
文の如く
者も三歎
にも三歎
に引し中
れ本題に
らるる引
入

もあまりくだらぬ事を長たらしく述ぶる時は本題の枕に
あらずして本題が枕のおともといふ姿になる之、總して枝
葉の事をあまりしつこくいふはよろしからず

第十一 音曲、道具立を以て話を助くべからず

三味線太鼓を入れて話を助け特に衣裳を附け書割りをか
けて話をあすものあり、たとへば歌の師匠の事を述ぶるに
あたり其の稽古の様をあらはさんとてわざ／＼眞の三味
線を持出してひき隅田堤に立回りの事件を述べんとて後
に向島の書割をかけ片肌ぬぎに出刃庖丁を持ちなどする
類なれども是は話術の本義にもとるもの之、たゞ三寸の舌
を以て三味せん大鼓の音をいだし、人物の風躰、場所の有様
をあらはすところに話術たるの妙は存するあり、所謂事件

と人物とを美術的に口述する處なり、然るを音曲家の真似ををし役者の真似をなすは話術家にとりて不見識のいたりからずや、然のみからずもし此く一々音曲、道具立をなすとする時は琴も三味線も笛も太鼓も盡く熟知せざるべからず、衣裳道具も充分に所持し役者たる技も修めざるべからず然らざれば歌の師匠の三味線としては不都合なる引かたををし向島の立回りに間の抜たる所あるべし、然れども世人もし眞の三味せんを聞んどあらば寄席に行くべし立回りを見んどあらば劇場に行くべし、抑も話術を聞かんと欲する者はデモの音曲デモの演劇を見聞せんと欲するにあらず、話術にして所謂美術的に演ぜんには自然に音曲、立回りを見聞するのあもひをいだかしむるに至る、何そ好

んでデモ藝を演ずるを要せん、話術の中にも聲自慢でうたひ腕自慢でひくあり、話の下手なるを埋合さん爲にするあり、俗受けの爲にするあり、物數寄の爲にするありといへども已を以て見れば聲自慢腕自慢ならば音曲斗り聞たし、下手な話の埋合せならば話をせぬがよし、俗受や物數寄の爲めに話の本躰を失ふが如き、眞の話術家のあす所にあら

第十二 次回に述ふべき事を預め畧述すべからず

あらかじめ知りたる事を聞かんよりの知らぬ事を聞くをよろこぶは珍しきをもてはやす人情より出るもの也、是が高尙なる書物の講義などならば知りたる事を幾度となく聞くも漸々味いで、面白さを増すことならんが通例の話

あどいしからず、面白き話なら二度三度聞きても飽あふずといよく人のいふことあれどもおなじ位の面白味の話あら變りたる方一層面白かるべし、圓朝の安中宗三郎の傳の最早大抵其の成り行きも知れ渡れるを以て今更聞くも面白からぬにあらぬと此頃はじめたる名人競らべの如く成り行きの知れざるものゝ方一きは面白し、此の理より推す時の客足をひかん爲に次回の話の大意を一寸述ぶるゝよしからずとおもはるゝ也、例へば、南無阿彌佗佛の聲モロトモスハヤ飛ビ込マントスル後ヨリ何人トモ分ラズ抱キ止メマシヌガ畢竟此ノ終リハ如何ナリマシヨウカ明晩ノト致シマシヨウ」といへば何人が抱止めたのやら善人か悪人か分らずして大よ次回の話の興を添ゆるものあれども

是を(前畧)何人トモ分ラズ抱キ止メマシヌ此ノ男ハ何某ヲ之ガ爲メ夫婦トナルト云フ一條ハ明晩」といひては大抵話の成り行き知れるゝ、此の他話中の人の談判などは甲の方やり込められて如何なる返答をあすやらんと聽聞者に氣をもませて話を切り次回に至りておもひ掛なき事を以て乙の方を駁するなどは話の手際よし、是を前より知らして置ては興味薄し、人或はいはん伊達騒動、越後騒動の類は既に皆人の知る處なれば、預め畧述せざるも次回の話の大意は知るものゝど、如何にも尤もの様なれども話術としてはどこまでも聽聞者の知らざることとして次回の大意をいはぬがよし、多くの人の中には伊達騒動、加賀騒動を始めて聞く人もあるべし

以上論し來りたるは愚案にて話術の法則ともいふべきものゝ大畧を示したるまでなり、此の他にもなほ法則めきたるものもあり又話の種類など論じたき事も多かれど其丈けの閑なく強ひて之をあさば本業をも害するに至らんもの恐れあれば茲に筆を擱く、見ん人之を諒せよ

臚云、土子君が落語講談の改良を説かるゝは久しき事あり前年發兌ありし「洒落哲學」の如きは實に本篇の前驅たるに過ぎず本篇もまた御本陣とはいふ可らず恐らくは幾年の後更に話術哲學の著あるべし何となれば本篇に言ふ所は重に實地にあてはむるを眼目とし并に今の話術家に訴ふるを本意とし未だ話術の理を説盡すに至らず、言ひ換ゆれば今の話術家を非難して

悪るき癖を除かしむるに注意し十數條の規則を設けて「かゝる事は斯すべし云々すべし」と教へられしにも拘らすまことは「斯すべからず云々すべからず」と今行はるゝ弊習を擧げて意見をいはれしが多ければあり併しながら斯くの如きは却て予が喜ぶ所あり本篇は戯著といひながらも娛樂に供ふべき書物にあらず學教導の書物なりされば強ちに理論に流れず實施を專一にして説明ありしは思ふに本篇の目的にも叶ひ世を益する事多かるべきか予は其教へかたの深切を喜ぶものあり

世人或は土子君の落語講談を好まるゝを聽いて君を滑稽洒落の人をかとしき人とのみ思ふもあり如何なる

君は(滑稽洒落を高尚の意味にとらば)滑稽洒落の人なり(を)かしを面白しといふ意味にとらば(を)かしき人なり但し洒落の人とのみ思ひ、をかしき人とのみ思はゞ違へり、君は極めて真地目の人なり事と品よりては剛情なり偏屈なり就中或種類の事については英國風の徳義を頑守するの人ありかりそめよも社會的及び哲理的の道義またがはんか君は毛頭も行ふを屑とせず又人を選まざ氣を入らねば直言す若し疑ふ人あらば廣く君の知交について問へ又は君の敵(洒落なるに係らず頑固なれば敵はあらん)について尋ねよ、卑劣なる敵にあらざれば根無し事を吐いて君をきづゝくる能はざらん、然り、君は嚴格の人なり内、真地目にして外、洒

落なり是予が君を滑稽家とする所以よしをかしき人と思ふ根本也予は明言す、君の信友也又信友たるを喜ぶもの也但し君は話術を愛し予は小説を好むの故にわらず君の説屢々予の説と合はず現に京都の旅寓にては激論五時間及びし事ありき殊々君の駘地口の如きは予の決して喜ばざる所あり否予が君を喜ぶは専ら君の洒落に基く高尚の意味にていふ洒落なり洒々落落、安心の地を得たるの度量と其直言直行俗を憚らざるの勇又服す、予の及ばざる所也此評若し溢美からんか予はみづから地位を低め信用を世間に失ふものなり

當今の落語家講談師動もすればみづから身を卑うし

笑ふべき鄙しき振舞をなす譬へば其むかし戯作者が
みづから小説の主人公を氣どりあるまじき行をさせ
しが如しかゝる有様にて引つゝかばたどひ其話術は
本篇を得て學術の仲間入をあす由ありとも予は美術
家の尊き名を彼等に與ふるを屑とせず全國の話術家、
若し本篇の主旨を奉ぜんとならば同時に「土子派の洒
落」を學べ

本篇を通讀し安ん思ひ出るまゝを評註す

明治廿二年二月下旬 辱交 春のや朧

版權登錄

話術新論畢

明治二十二年 中月 六日 印刷
明治二十二年 中月 八日 出版

定價金 三十五錢

著作者 東京府士族 土子金四郎

東京本郷區本郷弓町
壹丁目二十六番地

發行者 新潟縣平民 井上圓成

東京本郷區本郷六丁
目五番地

印刷者 佐久間司馬介

東京々橋區西紺屋町
二十六番地

發行所 哲學書院

東京本郷區本郷六丁
目五番地

印刷所 秀英舎

東京々橋區西紺屋町
二十六七番地



文學士 井上圓了著
 ○妖怪玄談 第壹集 定價金 貳拾錢 郵稅同 六錢
 ○哲學道中記 第壹卷 定價金 三拾錢 郵稅同 拾錢
 ○哲學一夕話 全三編 第貳編 定價金 七錢 郵稅同 九錢
 第三編 定價金 八錢 郵稅各册 貳錢宛
 文學士 辰巳小二郎著
 ○現行憲法比較 全壹册 定價金 七拾錢 郵稅同 拾六錢
 ○哲學茶話 全壹册 定價金 四錢 郵稅同 八錢
 ○西洋女權沿革史 全壹册 定價金 貳拾錢 郵稅同 六錢
 文學士 辰巳小二郎抄譯
 ○文明要論 全壹册 定價金 六拾錢 郵稅同 拾六錢
 ○斯氏哲學要義 全壹册 定價金 三拾五錢 郵稅同 八錢
 村上 專精著
 ○佛敎道德新論 全壹册 定價金 三拾錢 郵稅同 拾錢
 ○佛敎三大宗 全壹册 定價金 貳拾錢 郵稅同 八錢
 元老院議員文學博士 加藤弘之著
 ○德育方法案 全壹册 定價金 四拾錢 郵稅同 四錢

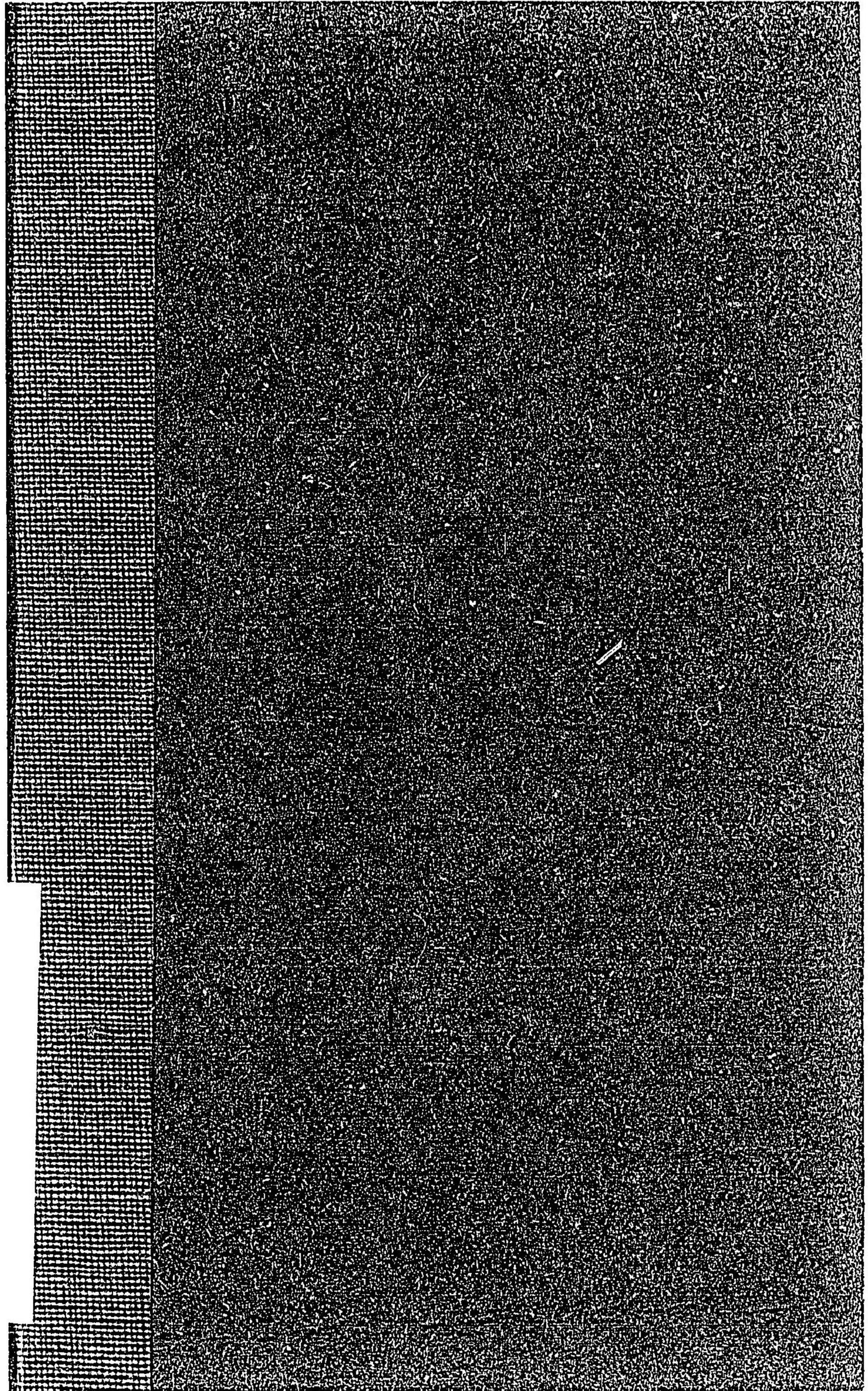
英國テート及スチワルト兩氏原著
 稻葉 昌丸譯
 ○未來世界論 全壹册 定價金 六拾錢 郵稅同 拾六錢
 大藏省次官 渡邊國武著
 ○印度哲學小史 全壹册 定價金 拾五錢 郵稅同 六錢
 文學士 棚橋一郎著
 ○佛敎之前途 全壹册 定價金 貳拾錢 郵稅同 六錢
 理學士 坪井正五郎著
 ○技藝看版考 全壹册 定價金 三拾錢 郵稅同 八錢
 杉浦 重剛 文學士 棚橋 一郎 合著
 ○日本通鑑 全拾册 內五册既刊
 第一卷 定價金 三拾錢 郵稅同 八錢
 第二卷 定價金 貳拾錢 郵稅同 六錢
 第三卷上 定價金 五拾錢 郵稅同 拾錢
 第三卷下 定價金 三拾錢 郵稅同 六錢
 第四卷 定價金 四拾錢 郵稅同 八錢
 杉浦 重剛著
 ○哲學こなし 全壹册 定價金 貳拾錢 郵稅同 六錢
 吉田 文三著
 ○春宵史談 全壹册 定價金 貳拾錢 郵稅同 六錢

シーシー、アロドリック原著
 內務參事官文學士 久米金彌譯
 ○英地方政治論 全壹册 定價金 七拾錢 郵稅同 貳拾錢
 トーマス、ム、リンドセイ原著
 文學士 平沼淑郎譯
 ○論理史評 全壹册 定價金 貳拾五錢 郵稅同 六錢
 トーマス、ラレー原著
 土岐 債譯
 ○國家學要論 全壹册 定價金 八拾錢 郵稅同 貳拾錢
 寺田 福壽譯
 ○人道敎初步 全壹册 定價金 六錢 郵稅同 四錢
 中山 理賢著
 ○佛門立志編 全壹册 定價金 貳拾五錢 郵稅同 六錢
 英國彌兒原著
 元老院議員西周譯
 ○利學 全貳册 定價金 壹圓 郵稅同 拾八錢
 漢文 定價金 拾八錢
 鳴地 默雷撰
 ○冠徒然草抄錄 全壹册 定價金 貳拾五錢 郵稅同 六錢

尾嶋 碩開著
 ○方鑒大成 全三册 正價金 七拾錢 郵稅同 貳拾六錢
 川島 純幹著
 ○GLORIOUS FRIENDS. 全壹册 定價金 貳拾五錢 郵稅同 六錢
 荷雁逸史著
 ○競舸必勝之策 全壹册 定價金 五錢 郵稅同 貳錢
 帝國大學印行
 ○水上運動必携 全壹册 定價金 貳錢 郵稅同 貳錢
 法學士 林田龜太郎校正譯補
 ○英國憲法及政治問答 全壹册 近刊



版權
所有
哲學書局



特19

467

話術新論

国立国会図書館

204740-000-3

特19-467

話術新論

土子笑面/著

M22

EDT-0131

